

Gas Asia Summitに参加して

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

10月29～30日、シンガポールにおいて、第3回「Gas Asia Summit」が開催された。本会議は、より上位の会議、「GASTECH」の地域イベントとして開催され、かつ、10月27～31日にかけて、シンガポール政府の主導の下で大々的に開催されたシンガポール国際エネルギー週間（Singapore International Energy Week）における様々な国際会議を構成する一つとしての位置付けをも有するものである。

この会議は、成長を続けるアジアの天然ガス・LNG市場の諸課題を正面からテーマとして取り扱ったものであり、アジアはもちろん、世界の天然ガス・LNG市場関係者が多数集まり、3つの基調講演及び8つのセッションで活発な議論が行われた。セッションテーマとしては、①エネルギーミックスと天然ガスの役割、②アジアの天然ガス・LNG貿易、③アジアの天然ガス需要拡大の可能性、④北米・ロシア・アフリカ等の新供給源、⑤中国・インドへの天然ガス輸入拡大見通し、⑥発電市場と天然ガス・LNG、⑦LNG市場とイノベーション、⑧アジアのLNGハブ、等の内容があり、各々関連する内容についてパネリストによるプレゼンテーションと質疑が行われた。

上記のような多岐に亘る内容について、様々な角度から議論が行われたが、アジアにおける天然ガス需要の堅調な拡大が続く、という点でコンセンサスがあったことを除くと、多様な、相反する見解が多く示され、アジアの天然ガス・LNG市場の行方には多くの不確実性があることも改めて認識させられる機会となった。異なる意見の代表的な例の一つは、アジアのLNG需給見通しである。消費国・輸入国の立場から多く示された見方は、アジアのLNG需要は増大を続けるものの、米国LNG輸出の拡大、豪州LNGの立ち上がり、ロシア・カナダ・東アフリカなど新規供給源の存在等から供給は十分であり、特に2020年頃にかけて需給は軟化の方向に向かう、というものであった。一方、供給者側の立場からは、需要拡大がさらに加速する可能性、供給プロジェクトの不調・立ち上がりの遅れの可能性、供給コストの上昇、需要家側がコミットしないことによる供給プロジェクト立ち上げ困難化、等の様々な要因のため需給は軟化せずむしろ現状のタイトな状況が続く、との見方が繰り返し示された。ある意味では、相変わらずの「平行線」の議論であったともいえる。

また、アジアのLNG価格形成メカニズムの将来像やアジアのガス・LNG取引ハブ形成の可能性等についても、まさに多様な議論が展開され、現時点では収斂の方向性は見えていない。原油価格が急落している現在、どの価格形成メカニズムが最も望ましいのか、価

格水準と価格形成の合理性の観点から、議論はますます錯綜する面も現れている。会議開催地でもあることから、シンガポールでの LNG ハブ形成について大きな期待を寄せる見解も多数示される一方で、アジアでのハブ形成に関する、取引流動性不足・市場透明性向上・市場自由化促進等の様々な課題も多く指摘された。アジアの LNG 市場の先行きには、やはり未だ多くの課題があると言って良いだろう。

こうした中、今回の会議では筆者にとって新たな「見る目」となるポイントを幾つか得ることが出来た。以下では中でも特に印象に残ったポイントを 3 点、それぞれ全く別の問題であるが、紹介したい。

第 1 に、今後のアジア LNG 市場の変化を占う上で、過去 20 年のアジア石炭市場の構造変化の経験が有意義ではないか、という見解である。(アジアの) LNG 市場の発展については、石油市場や欧米天然ガス市場の発展経緯との比較に関する議論は行われてきた。しかし今回の会議では、1990 年代には相対での長期契約における価格決定が圧倒的の重みを占めていた石炭市場が、その後の需給・市場構造の変化で、スポット取引増加・長期契約価格決定におけるスポット価格の重要性拡大が進み、現在は様変わりした点が指摘された。その指摘では、ステイタスクオを維持しようとする力は常に存在するものの、市場の構造的・趨勢的变化は、それに抗うことを難しくし、むしろプレイヤーがどう(時にはイノベータータイプに)対応・適応するかが重要である、という点が示されたことが印象的であった。

第 2 には、LNG 消費国側での連携に関して、様々な議論があった中、特に 10 月初めに発表された東京電力と中部電力による包括的アライアンスに参加者の極めて高い関心が示されたことである。このアライアンスによって、約 4000 万トンの規模を持つ世界最大の LNG 調達者が誕生することになり、今後のアジアの LNG 市場・需給展開の中で、どのような意味を持つのか、どのようなインパクトが生じるのか、より競争的な LNG 調達に成功するのか、等が引き続き注目されていくことになる。日本については、原子力再稼働とそれによる LNG 需要の低下と将来見通しがこうした会議ではこれまでは中心的な話題であったが、それに加え、プレイヤー側の新たな注目点が登場したといえるだろう。

第 3 には、ロシアと中国のパイプライン契約に関して、ウクライナ情勢の展開とそれに伴う欧米経済制裁強化の流れの中で、5 月の合意に引き続き、今後、追加的に西シベリアの天然ガスをパイプラインで中国に供給する計画(アルタイプロジェクト)実現に乗り出す可能性があり、場合によっては、5 月合意分と合わせてロシアから中国へのガス供給が 1,000 億立米を超える可能性がある、との指摘があった点である。これは、中国の将来の LNG 需要の伸びに大きな影響を及ぼし、アジアの LNG 需給環境をも左右しうる可能性を秘めた問題であるだけに、今後の展開に注目する必要があるだろう。

以上の 3 点、繋がり・まとまりはないものの、筆者にとっては今回の会議で特に興味を引いた Take away であった。今後もアジアの LNG 問題に関しては最新の情報収取とそれに基づいた分析が不可欠である。

以上